



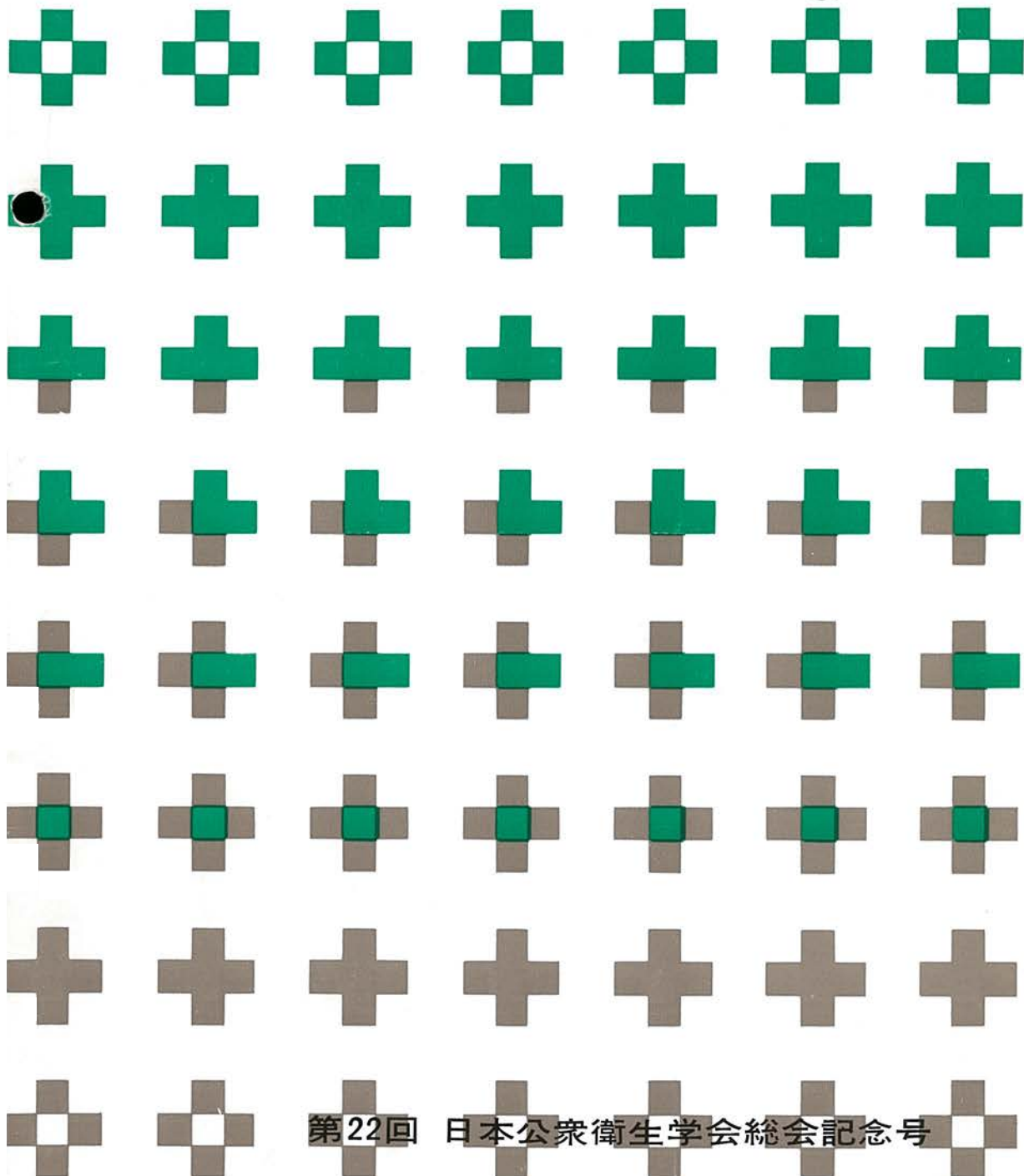
Title	大阪公衆衛生 第17号 (第22回日本公衆衛生学会総 会記念号)
Author(s)	
Citation	大阪公衆衛生. 1966, 17, p. 2-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84450
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪公衆衛生協会



第22回 日本公衆衛生学会総会記念号

大阪公衆衛生

PH 1966. 4 NO. 17

学会の印象	2～ 3
北海道から大阪へ	4～ 5
直前の準備	6～ 7
ようこそ学会へ	8～ 9
総会・大会	10～11
総会シンポジウム	12～13
分 科 会	14～15
自由集会・レセプション	16～17
学会の裏方さん	18～19
場外スナック	20～21
大阪の 3 日間	22～23
さようなら又会う日まで	24
たくましい協力のエネルギー	25
—座談会—	
学会総会	26～33
マンモス学会 1 年の歩み	34～35
学会を担当して	
ズバリー言	36～37
裏方の弁	38
附 録	
第22回学会総会の大要	39～40



学会の印象

昭和40年10月20日、第22回日本公衆衛生学会総会は、大阪市北区中之島、大阪大学松下講堂を中心とする6ヵ所、9会場で開催された。

総会シンポジウム3題、分科会は13を数え、応募演題は実に600題をこえた。全国から参集した関係者は3,500人に達し、規模、内容共に大阪ならではのマンモス学会と評された。

阪大松下大講堂に参加者1,300人を迎え全国公衆衛生大会が開催された



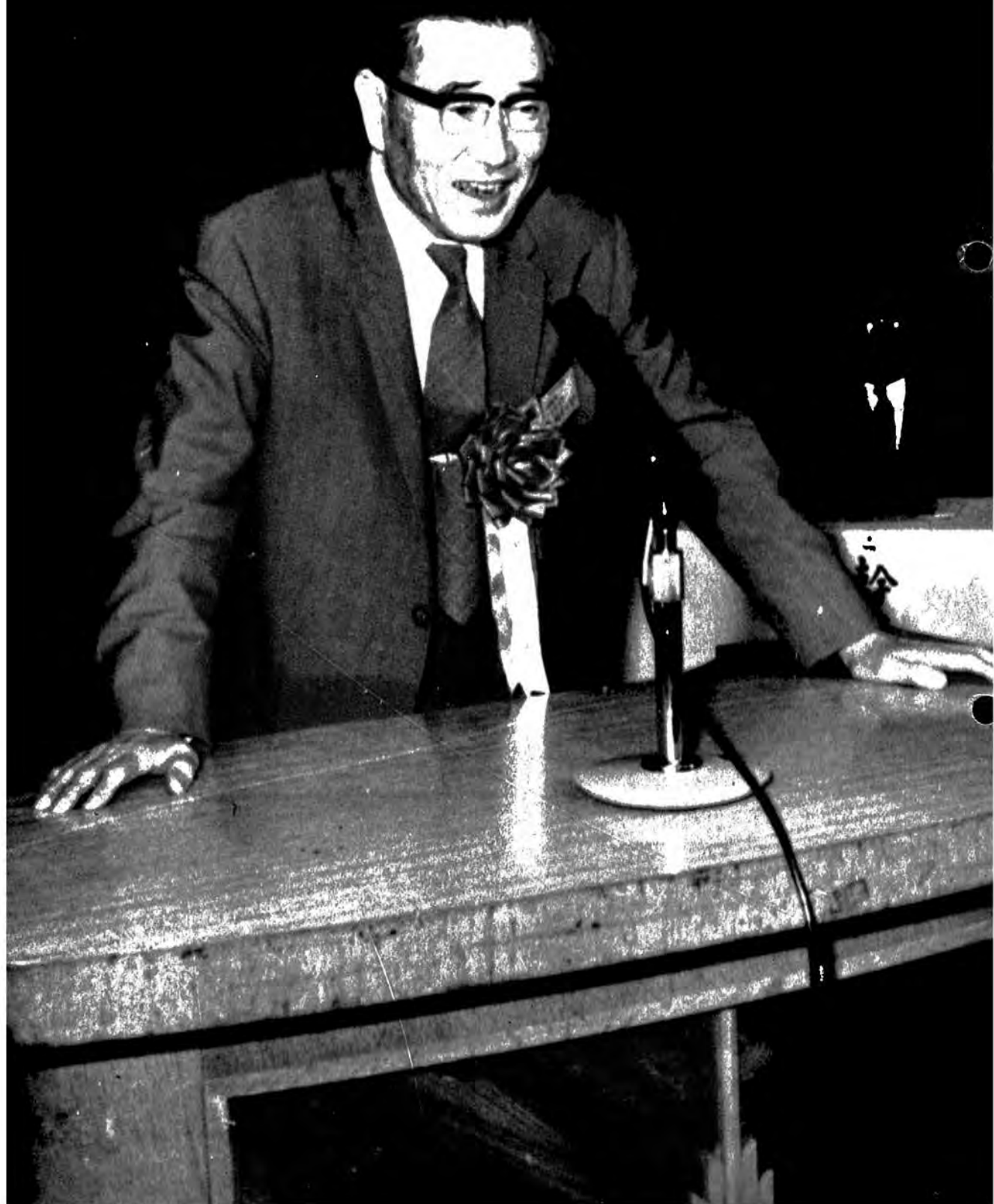


商都大阪のビジネス・センター中之島に第22回日本公衆衛生学会総会の9会場が設けられた。

今学会の主会場。阪大松下大講堂前は連日全国の参加者でにぎわった。



北海道から大阪へ





第21回学会総会の開催地、北海道札幌市でバトンをひき継いだ梶原大阪公衆衛生協会長は、その経過を協会役員会で報告。直ちに準備組織が編成され、学会総会開催への歯車は廻り始めた。

上 学会総会まで後ひと月、北保健所で最終連絡会議が開かれた。

中 マンモス学会を成功させるため幹事会をしばしば開催。

下 600余の演題を消化する分科会場の割り当は難行した。

左 北海道札幌市民会館で第22回学会総会ひき受けの挨拶をする
梶原協会長



直前の準備

いよいよ学会総会の前夜、各分科会、総会シンポジウムの担当者は明日に備えて万を持し、一方、事業部関係者は会場設営、運営準備に最後の追込み、夜の更けるのも知らず、**「大阪学会」**の成功へ、点検と準備を行った。



マンモス学会だけに看板類も多くその数は100枚以上のぼった。



その前夜、学会総会の大会板は松下大講堂へはこびこまれた。



会場担当者の指示で壇上設営を急ぐ各分科会場。



各会場の事務消耗品配分に多忙の事務局員。

学会で食中毒をおこしては……と弁当業者の監視は特に人念に。

ようこそ学会へ

全国の公衆衛生関係者ようこそ学会へ…。大阪の玄関口は数が多い。人も多く車も多い。ことに会場がある中之島周辺は高速道路、地下鉄の新設工事等で近年その様相を一変し大阪人ですらややこしい。

要所、要所に案内板を設置したものの、遠来の客に迷子になられては……というのが事務局の心配の種。でも、そういう苦情はあまり聞かなかったようだ。



大阪駅前の通勤ラッシュに遠来の会員ビックリ



開通したばかりの地下鉄肥後橋駅に貼られた学会場案内

学会員を乗せて超特急ひかり号新大阪駅へ



マンモス学会の会場案内には事務局員も一苦労

早朝からつめかけた参加者で混雑する総合受付



総会・大会

総会と公衆衛生大会が同日、同会場で相前後し開催されたのも今年の学会の特徴。

このため、例年、閑散とした公衆衛生大会も、今年は松下大講堂あふれんばかりの盛況であった。



総会で議事を報告する曾田幹事長

最前列には栄の表彰を受ける功労者がずらり



千葉大谷川学長次期学会長のリボンを…





全国各地から参加した学会員で会場はいっぱい。

カメラのライトを浴びて賞状を受ける功労者



総会シンポジウム

総会シンポジウムは3日間連日、メイン会場—阪大松下大講堂で開催された。

第1日の「府県レベルから見た公衆衛生行政」は元大阪府衛生部長で現府立公衆衛生研究所、古野所長の司会で府県段階の衛生行政にメスを入れ、第2日は、西尾京大教授の司会による「総合保健活動の成立の条件」、ロールプレイングとも思われる意表をつく討議の中で問題点を浮きぼりし、更に第3日、公衆衛生従事者の職能組織」は庄司京大教授司会による、**「職能代表」**によるものと**「自由な立場」**からの2部編成で、職能組織の現状と方向について論及された。



シンポジウム「府県レベルからみた公衆衛生行政」

古野府立公衆衛生研究所長の司会で…

主

三

第22回日本公衆衛生学会総会



総会シンポジウム「公衆衛生従事者の職能組織」

司会は片岡京大教授



総会シンポジウムは終始なごやかな雰囲気の中に進められた。



右 総会シンポジウム「総合保健活動の成立の条件」

左 司会は西尾京大教授

分科会

分科会の数が多かったことも今学会の特徴の一つ。各分科会とも、内容の充実をはかるために積極的な努力が払われた結果、総応募演題は600を突破、各分科会では割当時間帯内消化に四苦八苦、シンポジウムや壁発表の中で応募演題を消化するところもあった。

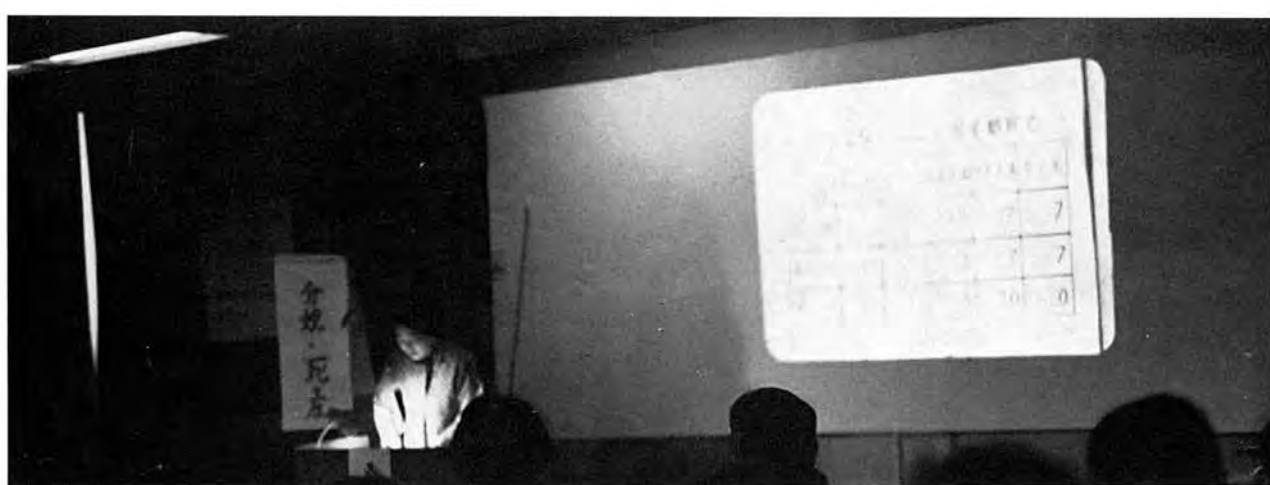
分科会にはシンポジウムのもたれるところが多かった。

司会者の苦勞は能弁な各演者の発言時間の調整にある。

会場からも活発な発言や質問が行なわれた。

一般口演の制限時間7分に発表者も苦心さんたん。





口演にはスライドがフルに活用された。



壁発表を熱心にメモする参加者
坊やもママといっしょにお勉強



部屋いっぱいに貼られた壁発表資料



場外スナック

天候に恵まれた3日間であった。秋晴れの下、中之島、阪大の一角は、コバルト色の演説要録を抱えた参加者でにぎわった。

ある人はあわただしくつぎの会場へと歩を急ぎ、ある人は学内の芝生の上にノートを開きひろげ、またある人は特設売店に憩いのひとときをすごす。



業者提供の乳酸菌無料試飲場は大にぎわい。



学会も3日目となるといささか疲れました。

会場に特設された土産物売場は初日から大繁昌。





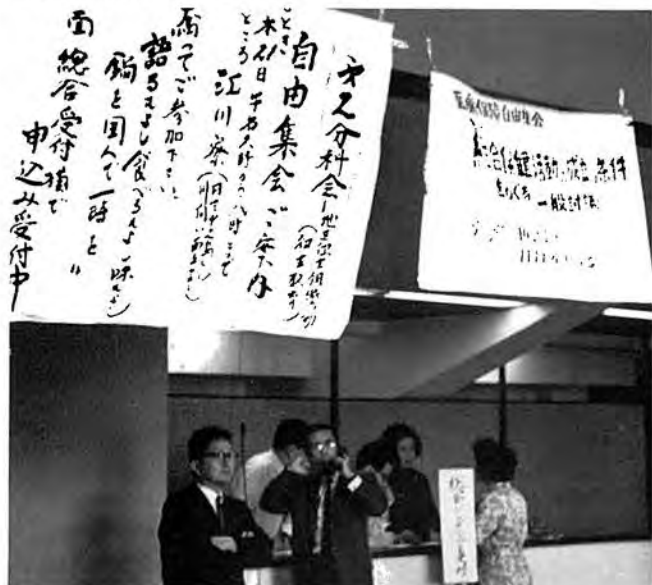
専門図書の売場もいっぱいの人だかり。



聞け釜ヶ崎の声！文芸サークル裸の会はバスを仕立ててご招待。

お昼休みのひとときも無駄にしないで…。

大きな貼り紙で自由集会は参加者を勧誘。



自由集会

自由集会の形式はその名のごとく多種多様、昼間のシンポジウムの延長で、口角泡を飛ばすところもあれば、鍋料理を前にお国自慢ののどを競うところもみうけられた



総会シンポジウムに引き続き、夜の自由集会で延長討議。



夜の更けるのも忘れて熱心に話し合った。



大いに飲み、食い、語る楽しい自由集会。

レセプション

全国都道府県の衛生部局長、各大学の主任教授など日本公衆衛生学会幹部の、大阪府知事、大阪市長招宴が10月21日、コクサイホテルで行なわれた。

大阪府、市の代表者に
迎えられてレセプショ
ン会場へ。



第12回学会長今村阪大
名誉教授のごあいさ
つ。



◆おかげさまで盛大な
学会をもてました…◆
◆大阪の皆さんご苦勞
さまでした◆

乾杯!!



大阪の3日間



よく見て歩いた。大阪の変ほうは激しい。ハイウエーは川の上もビル街もかきわけて走る。

全国から来阪した参加者の中には大阪ゆかりの人も多い。阪大松下大講堂を埋めた参加者の中でカメラがとらえた山形県公衆衛生課長の浜口剛一先生もその一人。この阪大出身で3年前まで大阪府吹田保健所の所長さん。よく見、よく聞き、よく語り、かつ、よく飲み、よく歩きたい……といわれる浜口先生の後をカメラは追ってみた。



よく語った。シンポジウム出席前のひととき控室で…懐かしい顔がそろう。

日本公衆衛生学会



第2日目、第1分科会のシンポジウム「母子保健法をめぐって」では壇上の人。

よく聞いた。どこの学会でも総会シンポジウムだけは欠かさず聞くという。



夜の自由集会。公衆衛生院の同窓会でもよく飲み、語った。旧友のつとめ、楽しいひととき。



学会の楽しみ、それは懐しい人達と再会し、欲談する喜びにもある。



学会の裏方さん

9会場、3日間にわたる学会総会の運営は総会シンポジウム、分科会担当者の苦心もさることながら、舞台裏方の労苦もまたひとしお。しかし、緊張したひとときが終り、無事責任を果たしたときの喜びはまた格別というもの。

上 会場の発言を一言もみらず録音する記録係。

下 本部では各会場の入場数を時間を追って記録。



日(20日) 午前 午後

会場	分科会	開始	終了	時間	人数	備考
住友	9	70	150	250		
大同生命	5	20	40	80		
南電キール	12	50	130	150	100	
松下(大)	3	700	900	1200	1100	2
松下(小)	11	30	130	160		
日生(大)	1	20	105	146		
日生(小)	8	30	65	30	180	20

日(21日) 午前 午後

会場	分科会	開始	終了	時間	人数	備考
1 住友	9	100	200	200	210	
2 大同生命	10	50	250	300		
3 南電キール	12	40	60	150	100	20
4 松下(大)	4	60	350	450	1100	1300
5 松下(小)	11	80	160	150	160	120
6 日生(大)	1	70	280	430		
7 日生(小)	2	180	130			
8 日生(小)	7	160	170	100		

日(22日) 午前 午後

会場	分科会	開始	終了	時間	人数	備考
1 住友	13	50	250	270		
2 大同生命	10	30	300			
3 南電キール	12	50	150	150		
4 松下(大)	9	100	150			
5 松下(小)	4	40	140	100		
6 日生(大)	2	20	120			
7 日生(小)	6	55	80			
8 日生(小)	7	160	170	100		



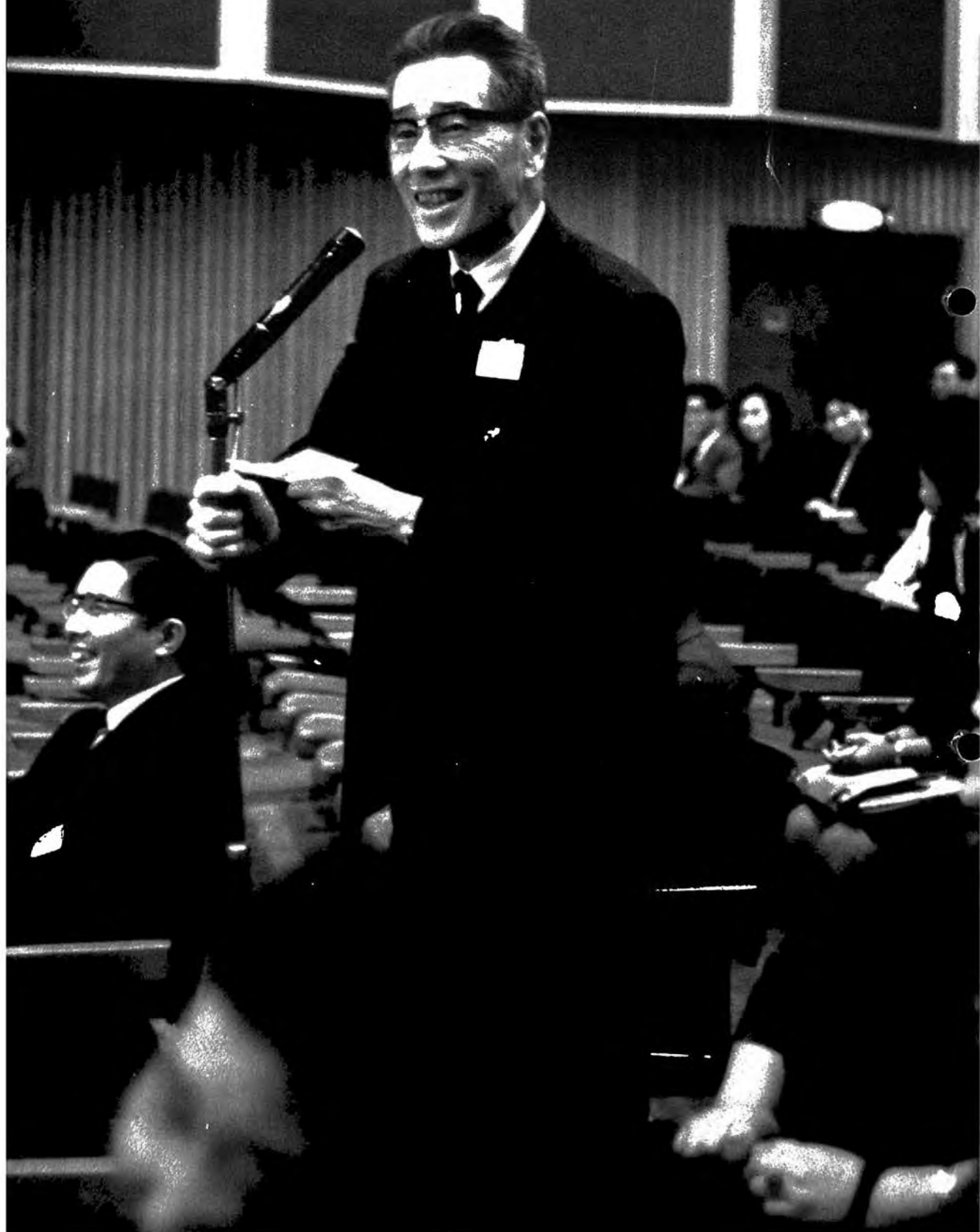
食事する間も電話応待に忙しい本部。

上映する一枚一枚にもスライド係は気をつかう。



時計片手と口演進行をみまもるタイム係。

さようなら又会う日まで



たくましい協力のエネルギー

御堂筋のイチョウも色づいて、秋晴れの素晴らしい3日間であった。大阪で開かれた第22回日本公衆衛生学会総会を終わって、東京から出席したある教授がこういていた。「一糸乱れぬ運営だと、しみじみ感じました。これは、大阪でないとやれないことですな」

参加者は3000人をオーバーした。ちょっと他の医学会ではみられないほど、学会参加者の多様性が目立つ。大学、研究所の学者だけでなく、行政関係のX線技師、監視員さんまで……。女っ気が多いのも、一つの特徴であろうか。保健婦さんでほとんど埋まった会場もあった。

この多様性を、ひとつに盛り上げて、総会を好評のうちに終わらせた原動力は、いかにも大阪らしい“協力のエネルギー”ではなかったろうか。大阪府、大阪市の行政当局と、在阪各大学の衛生・公衆衛生学教室が、緊密にタイアップして企画・立案・運営にあたったことが、第22回総会にたくましい、土性骨をたたきこんだといえよう。「公衆衛生の学と実践とが分ち難い」ことを力説し、日ごろから協力態勢を樹立していた Osaka School の輝かしい記念碑の一つ……として、自画自賛を許されるであろう。

第22回総会は、昭和40年10月20日から3日間、阪大松下会館など中之島を中心にした9会場で開かれ、コバルト色の演説要録を抱えた参加者で、堂島川のほとりは早朝からにぎわっていた。

総会シンポジウムは3題。いずれも阪大の大講堂が満員になり、さわやかな秋冷の日に、ここばかりは熱気がこもっていた。

分科会の数は、計13分科会でのシンポジウムは12題、特別講演1題、要望課題講演1題。一般口演は、600題以上にのぼった。どの会場も熱心な聴衆が予想を上まわってつめかけた。

医学会があると、大阪の夜はにぎわい、ミュージックホールなどはどこも満員になるそうであるが、高血圧や理論疫学などの自由集会もちゃんと催されて、終日、研究にハッスルした参加者も多かった。

8年ぶりに大阪で行なわれた公衆衛生学会は、このように盛大に行なわれ、そして終わった。このアルバムは、全国から参加した会員の記憶の申に、とりわけ、この日のために、精魂をかたむけた地元大阪の関係者一同の心の申に、いつまでも「第22回日本公衆衛生学会総会」の姿を刻みこんでおくために、そしていつかまためぐってくるであろう大阪での学会へ残す遺産の一つとして、大阪公衆衛協会によって企画、作製された。

学 会 総 会

学 会 長	梶 原 三 郎	大阪大学名誉教授 大阪公衆衛生協会長
副 会 長	古 野 秀 雄	府立公衆衛生 研究所 所 長
企画代表幹事	関 悌 四 郎	大阪大学医学部教授
企画幹事	中 山 信 正	市立衛生研究所長



北海道から大阪へ

古野 では大阪で学会をひき受けるに至った経過あたりから梶原先生にお話ししていただきましょうか。

梶原 あれは北海道での学会の少し前、名古屋も広島もひき受け手がないということで、大阪でやってくれないかというお話が東京からあった。

ちょうどそのころ、千葉にも話があったののだが上の方の了解が得られない状態にあったのです。

大阪では、9月17日だったか、期日に迫られ、ひき受けてもよろしいということになり、私が飛行機で北海道にとび、学会直前の理事会に臨んだというわけだが、その時、ひき受ける条件の一つとしてまず各都道府県が学会開催経費の分担金をもつということであった。しかし、この学会を大阪がひき受けるについては随分苦労したね。当時の府の衛生部長である古野さん、あなたが一番苦労している。

古野 学会をひき受けてほしい、という話があったから、関教授をはじめ、関係者で協議した結果学会をこれからやる場合、2つのことを提案し確認を求めることとした。一つは、開催地等は次年

度、またはその次の年度まできめておくということ。もう一つは、さきほど梶原先生から話があったように各県から応分の分担金をとるということでは了解を得られた。

学会開催については“府ならびに市から相当経済的にも、また、準備その他についても一体となって応援しなければならない、それから内容については阪大が主として連絡をとってもらわなければならない”そんな了解が得られれば大阪でできるだろうが、私が一番心配したのはやはり経済的な問題で、私は副知事を訪ね相談した。そこでおよその内意を得、これなら大阪で引き受けても大丈夫だという自信を得たので「やりましょう」と皆様に決心をお願いしたわけです。

しかし、都道府県の分担金については、私は最後まで、当時の厚生省保健所課長の金光君—いま愛知へいらっしゃいますが—彼に責任をとってくれといいました。それを条件としてひき受けようと。

それやってくれなければ学会の間際になっても大阪は断るから、というような極論的なこともいって、まあ、そのルールの確立を強く要望した。

関 いまの話の2年説ですがね。9月ごろに決まって翌年10月にやるということは第12回学会をやったときの感じでは非常に時間足らずになってね。それで2年説を主張したわけなんだが2年先



のことを言って予算を組めるかということになると、これはヤボなことを言ったものだと思うのですがね。

古野 いや、これは心構えの問題でしてね。2年ぐらい必要ですよ、準備には。

中山 実際にもう少し時間ほしかった。

関 それはほしいですよ。2年前ぐらいにわかっている方がいいですよ。

古野 今回で、そのルールがおおよそ確定できたんじゃないか。こんどは千葉で、そのつぎは仙台でしょう。

結果からみると学会はうまくいったのですが、いちばん最初に会合をやったのはいつでしたかな。

中山 10月2日ですよ。北海道から帰ってすぐでしたからね。

関 この前の第12回学会をやったときに比べると随分気を抜いていますよ。もっともあのときは、神戸や京都の大学、奈良や和歌山の人たちにも参加してもらってやりましたからね。

こんどは、それをやめてほとんど大阪在住の人たちでしょう。これは成長した……という具合が悪いが経験をつまれましたからね、だからやれるようになったんだ。

中山 第12回学会に比べると運営組織は非常に簡

素化されましたね。

■うまくいったチームワーク

古野 私はいまから考えてみてチームワークが非常にうまくいったということだろうな、これだけがちりいったのはほかにはない。

行政機関相互間、それに大学の関係はどちらかというところの府県でもうまくいかないところが多いようです。これがね、大阪ではいろいろなことを言っても気持ちがつながっていましたからね。

中山 まあ異存があったかもわからないがともかく、みんなつながっていた。みな誠心誠意という感がありましたね。(笑)

関 まあ誠心誠意やったかどうかわからんけれどもケンカの方も誠心誠意やったね。(笑)

古野 それは君、学会のためのケンカだから悪い意味ではないよ。

中山 初めから大いに議論しましたから……関先生もなかなか強硬でしたからね。(笑)

関 それでもみんな慣れられたということもあって確かにうまくいったです。まあ一つには大阪公衆衛生協会が成長したということ、それが大きいのではないですか。

梶原 公衆衛生協会の部会活動が割合成長してい

たんだな。

関 年令は成長するものですが内容が成長したかどうかは考えようですよ。でも人間関係はよく熟していたようですね。

古野 こんどの学会でシンポジウムの数、ずい分整理したつもりだけど非常に多かったな。

関 分科会ではシンポジウムはやらず総会シンポジウムだけにしぼるつもりだったんですけどね。結局やることになってしまった。しかし、やってよかったかもわからないな。

梶原 やらざるを得なくなってやったということだな。

関 多少そのきらいもありましたね。

古野 もう少し数が少なくてもよかったという気も僕はしている。

関 シンポジウムをやるのでふくらみましたからね。あれ一般演題だけ消化するのだったらもっと楽でしたよ。

古野 演題数 609 というと、いままでの学会でいちばん多かった。恐らくこんな多い演題数、会場、その他、こんな大きな規模の学会は過去になかったのではないですか、マンモス学会でしたよ。いい意味の……。

中山 だいたいこれは一週間くらいの会期をかけてやるほどのものですね。

梶原 万国博覧会の年にやるか。

古野 ただね。1週間もいいんですが互いに勤務にしばられている。それが1週間、たとえば大阪にくぎづけということになりますと10日くらい、任地をあげなければならない、そうすると相当な責任の地位にある人は不可能じゃないですか。

関 研究所とか大学ならまだいいが10日間という保健所の場合実際いろいろな面で実行不可能となるだろうな。

梶原 しかし、日本の公衆衛生で責任のある地位に立っている人たちが全部一堂に会しあの期間、論議、反省する機会をもつ必要があるのではないか、万国博の“人間の進歩と調和”というテーマもあることだし……。

関 一案ですがね。

中山 僕は一年に1回、1週間くらい任地を離れて学会をやっても当然のことと思われる雰囲気はほしいです。全部が命令で1週間来ているのではない。1週間のうち、2日や3日はもちろん出て

来るだろうし、これない人もあるだろう。

関 休むと働くという感覚が違うからね。

古野 日本はそこまでいっていないよ。しかしこの学会の特長は行政畑で科学行政をやっている人、保健所で働いている人、あるいは研究をやっている人が大多数でしょう。だから、それらの人が出席できるようにできるだけ便宜をはかってもらいたいと思うね。

関 まあ実際問題としてやはり“3日”ということだろうな。

古野 関連の学会、集会は離していいと思う、離すことがいいかどうか歴史的にも問題はありますが……。

関 これは人為的にいかないんだな。

梶原 しかし今度の学会ではなるべく離すように努力した。

関 僕もそろそろそういう気持ちができかかっていると思うんですがこの大阪方式必ずしも意見は一致しないんですからな。だから、おまえけしからんというわけにもいかんですから……。

学会の型は2つあってもよい

古野 これからの学会のいき方として、大阪が決してうぬづけるわけじゃないがこのようなマンモス的な規模のものはそうどこでもできるわけで

“衛生部長さんよ
東京の空ばかり向かないで”

山形県寒河江

保健所長

斯波 八郎氏



ズーザーベンの山の中から、「府県レベルからみた公衆衛生行政」について何をお話しようかなあと考えているところです。

府県行政は、三割自治といわれるが、私は一割自治以下ぐらい、地方自治体でなくて地方他治体ではないかと思う。衛生行政の領域拡大にも同感だが、保健所の立場から私の結論は、「衛生部長さん方よ、東京の空の方ばかり向いていないで、県民の方を向いてちょうだい」ということです。

大阪の印象？ 超近代的なホテルということですが、隣室の水洗の音がやかましくて、建築は案外お粗末なんですね。

はなかろう。で、千葉県でこんどやられるのは本当の意味の地味な内容のある学会になると思うのですが……。従って、シンポジウムの数なり、分科会の数は相当整理する傾向にありますね。これも一つの行き方かと思う。だから私は、型は二つあってもいいのではないかと思うのです。4年に



1度くらいそんなのをやって、それから例年の学会はもう少し開催しやすいものとする……。

関 場合によると、分科会の数も限定する……。

古野 理想としてはね、

全国の各県でそれぞれ開催するのが本当だが、実際問題としては不可能でしょう。そこで、いくつかの県が廻りもちするということになるがその中でも、いまいったような相当大きなものと、比較的小規模のものに大別されて開催されるということになるのではないかと思うんですがね。

関 そうあってもよろしいな、イギリスのロイヤルソサエティの学会、まあ日本の公衆衛生学会のようなものだけど、あれなんかほとんど、3つくらいの場所を動かしているようだがね、しかも大都会にはいかないでまるで避暑地のようなところでしょう。……保守党の大会だとか、労働党の大会などもそこでやっていますよ。

古野 しかし、成り立ちが違うよ。会費をよけい徴収している。日本でも、なにかかも役所もちだとか、寄付にたよるといふ風習はできるだけ整理すべきではないかと思うがね。

関 実際はそれだ、一番の問題はそこにあると思うな。

古野 これからの学会は、やはり、参加者が、相当額負担するのを原則とし、これに充分の地元の援助を得る……というように方向修正しないといやがられますよ。

中山 レセプションなど遠来の客に対する儀礼的な接待は地元でやっていいと思うのですが、学会運営の基本的な経費まで地元ではね、まあことしから府県分担金制度が出来て多少かわりましたけどね。それよりも、参加者がある程度負担できるような給料をやってくれたらなあと思いますよ(笑)

梶原 こんどの千葉の学会は、やはり分科会を制限するだろうな。

関 いかに分科会の数を制限しても演題はできますよ。第12回学会のときも要望課題をきつく出して、これをまとめてパネル式にやろうじゃないか、それ以外のものは誌上発表に止めようという考えだったんですがだめだった。

古野 この間、日本公衆衛生学会の幹事会で私は意見を述べておいたのですが、府県で沢山出て来た演題を地元でそうチョン切るわけにいかないですよと。

そこで、日本公衆衛生学会としてある程度、大綱を示しなさい、大筋を本部でお決め願ったらどうですか……ということをお願いしておいたんですがね。

関 初めのころは非常に強くいっていたんですよたとえばシンポジウムのスピーカーも決めかねまじき様子がみえたのでこれには私は強く反発したんです。が、しかし、いまおっしゃったようなコントロールはいいでしょうな。

古野 統制というような印象を与えないで、アドバイスをするというルールをね。

中山 分科会もある程度、固定してもよいと思うんです。学会毎に、分科会の名称も違うし、数も違うのでは困る。

ある程度、10なら10の分科会が一樣にあるという

“大阪は忙しい街”

ABCC 統計部長
アントニオ・

チャコ氏



私は米国のピッツバーグ大学で公衆衛生学を担当しているのですが、この学会には沢山の人がこられて熱心に討議しているのを興味深く拝見しました。日本の公衆衛生事業に望むことは、厚生省や大学の医学部が必要な人を養成すること、効果測定を実施すること、さらに報道機関の協力を得ることが大切です。大阪は初めてですが、とても忙しい町ですね、大都会の大気汚染は日本も米国も同様でむづかしいことです。カルホルニヤでは、自動車の排気ガスの規制をしていますが連邦政府も1968年に実施します。

ように……。

梶原 新しいのが出たのは大阪が殆ど……(笑)というのもまた愉快だけだね。



もっと学会に特色を……

古野 それからもう一つ。公衆衛生学会の特色というものがもっとでてきて良いのではないかな。

われわれの関係しているものだけみてもいろんな専門学会がありますね。学位論文的、あるいはオリジナルなものはまずそこへ出す。その次のものを……という語弊があるが、もっと公衆衛生学会の権威を高めるために、また、特色や、魅力をもたせるために、この学会に独自のニュアンスをもたせたいね。まず良い論文はこの公衆衛生学会へというプライドを持つような特色を持っていんではないかな。

公衆衛生学会というものはその構成メンバーからみても、特殊な分科会がその中から生まれてくる。あるいは学会そのものがそういう性格、権威を帯びてくるというように大学をはじめその他関係者もこれを盛り立ててもらいたいと思うんですかね。

“巡回バスがほしかった”

金沢市彦三保健所長

野村 潔氏



学会では同じ仲間に会うのを楽しみにしています。府県レベルからみた公衆衛生のシンポジウムは、よい勉強になりましたが、一般の口演は日常業務で常識的といわれるようなのがあり検討すべきですね。また結論がなにかわからないのがあり結論を先に出せないかと思うのです。それと会場が離れているので各分科会を見て回るのに巡回バスがあればいいですね。大阪は32年の学会にも来ましたが、高速道路もでき近代化されていますね。前には川にごみが浮いていたが取除かれてきれいになってます。

関 これはだいぶんよくなりました。二番せんじのようなやつが多くて困ったのですがこんなのはだいぶん減りましたね。これからは特色も出るでしょう。たとえば循環器関係学会の人たちが、公衆衛生学会といってくるようになりましたからねでも、何といっても公衆衛生プロパーの仕事、たとえば衛生教育だとか、行政の分析であるというようなものがもっと出ないといかん。

古野 いかんね、ほかの学会とちょっと離れた特色のあるものだから……。手っ取りばやい話、公害の問題なんかまだ公害学会というのはないのでこんな問題は公衆衛生学会の一つの特色になり得る可能性がある。

梶原 僕は各分科会全部まわったけれど、衛生統計なんか非常に質が良くなっている。

関 ことしの衛生統計の分科会は、従来の形を破って、衛生統計の行政への活用という衛生統計の業務に関するものに非常に重点をおいていた。

それから分科会の数ですがね、増やして恐縮のような感もあるし、また、大阪は増やしていかなかったとあからさまにいう先生方もあったが、しかし医療保障だとか衛生行政、公衆衛生看護、公衆衛生監視そのほか名前はむづかしいけれど大阪で始めて入れたようなものだ。それからこの前に入れたものと残っているということで、私

“大阪の街はほこり、ほい”

北海道大学教授

井上 力太氏



私は元来物理屋で流体が専門です。5年前北大に衛生工学科が設けられ、空気関係の講座を担当していますので、この学会で室内空気イオンについて発表しました。最近ビル病というのがはやっていますが、これは空気中の陰イオンが少ないのが原因といわれています。高山では3,000から4,000くらいもあるのに室内では200以下なんです。それで陰イオン発生機をとりつけて空気調節しているのですが、その密度分布をどうするか問題があります。大阪の町はほこりよく感じますね。

はこれが本筋のように思うのだがな。

古野 この公衆衛生学会へ出し方の内容にもよるのですね。たとえば、結核の問題にしても結核予防学会に出すものとはおのずから内容が変ってくる。

中山 社会科学的な行政の問題がはいってこなければ公衆衛生学会ということになりません。

関 公衆衛生学会は立派な学会ですよ。その証拠でもないが、こんどのいわゆるマスコミに関し学会の扱いなんてものはこの前に比べて格段ですよ。この前の学会なんか1段で1寸5分ぐらいしかなかったですからね。(笑)

社会性を帯びてきた公衆衛生

古野 いわゆる公衆衛生というものは毎日、新聞にのらない日はないくらい社会性を帯びてきたということもありますかね。内容そのもの、学会、あるいは従事者そのもののレベルが相当、学問的に上って来たね。

関 それはいえますね。だからやっかいなようでも、ムダなようでも、やっぱりまじめに取り組まなければいけない反省はあるね。

古野 これはやっぱり大学もそういう気持ちだから、良くなってきたのだが、どちらかというとい

“学会偶感”

国立公衆衛生院

橋本正己氏



秋晴れと地の利に恵まれ、第22回公衆衛生学会総会は稀にみる盛況だった。昭和32年の学会以来8年目、今回も大阪ならではの意欲とたくましが企画に感じられて嬉しかった。大阪を離れて13年、日頃の東京の雰囲気と比べて、このことは私の強い実感だった。とくに総会シンポジウムは今回の特色であろう。批判もあろうし、少々ワサビが効き過ぎたものもあったようだが、学会として前むきの姿勢が感じられてよかった。激しい時代と社会の流れの中で、人々の健康と生活を守るために、公衆衛生の前むきの姿勢の確立の重要性が強く感じられた学会だった。

学はいままでソッポ向いていたのと違うか。(笑)

関 何にしろそういうクセがあるんでね……まあやや熱心になってもいいんじゃないかということころまでいっているんだろうな。

しかし、古野さんの前でそういうことをいっちゃなんだが府県の衛生部長や局長が副会長をやるというような学会は、僕は不賛成ですよ……という人もいますよ。

古野 僕はその見方も当たると思うんです。衛生部長や局長というのは、およそ学問とは縁の遠い雑務が多いのですよ。もう少し雑務を離れさせてくれたらそのような批判は自からとれるのですがね。衛生部長をもっと科学者になるようにしてやりたいものですな。

関 しかし衛生部長という仕事はたいへんだろうけれど衛生部長をやる人は原則的に学問的素養があるものだという考え方があるのでその説は私はおかしいと思うな。ただし、府県によってはそのような感もなきにしもあらずでしょうが。

中山 実際公衆衛生を動かしている大きなカナメ役を日常活動でやっているわけで、だから学会で副会長をやれないはずはないと思うのです。



古野 だから衛生部長がもっと科学行政をやれるようにバックアップしてやる必要があるな。

関 まあまあ要するに両々相まってやるべきだということで、その通りだな。ただ、その関連で、厚生省の幹部諸君にもっと学会へ関心をもってほしい、なるほど忙しいだろうしあるいはまた、幼稚だという考えがあるかも知れない。もっとも、今回の学会なんか割合よく出席されたし、演説もやっていただいた。しかし例年の学会はやや目に余る感があつた。

梶原 もう一つの特徴というのは、厚生省の主脳部だとか衛生部の主脳部よりも、その下で働いている人たちといっしょにやらなければいけない、メデイカルだけで全部やれるという気持はいけないということがはっきりしたんだな。

古野 公衆衛生ってものはそんなものですよ。

梶原 その人たちにオレたちもやっているんだという意識を与えたね。

■ 苦労したシンポジウムの座長

関 府、市は参加している、保健所もちろん参加している。大学も参加している。厚生省も……これは従来やや義理で参加しているくらいがあったが今回はそうではない。

ところで今度の総会シンポはどうだっただろう。

中山 苦労したね。(笑)

古野 評判はよかったですよ。ああいう題目を選んだということについてうぬぼれかも知れないが必ずしも評判は悪くないですよ。

中山 僕は題目が決められてからやったのだけど決まるまでの責任者は大いに苦労なさっただろうと思いますね。

関 テクニカルに言えばやっぱりスピーカーが多過ぎたね。座長のコントロールのきかなかった点も……これもスピーカーの方が悪いんだがね。

梶原 座長って、あんまりコントロールできないものですよ。

関 実際できないですね。

中山 シンポジウムは、どんな演題をとってみてもね。これからつくらなければならないものばかりなんです、古野先生は過去衛生部長としての蓄積があるでしょうけど。職能組織にしましても、医療問題でもね。ああいう形でシンポジウムをもつのは……まあ火つけ役みたいな形。うまく

いかなくてもやむを得ないだろうと思うんですよ。古野 それはでき上った結果をいうのではないからね。これからの構想なり、シンポジウムのテーマになってもよいと思いますな。

関 まあ僕は失敗だったと思わない。おもしろかった。

梶原 2日目の総合保健活動成立の条件の問題は、どうかボケちゃったね。

関 成立の条件がないってことになっちゃったのには驚いたね。予防と治療をひっつけようということに通ずるのだから個人の開業医の先生がやっていることもあるだろうし、ある程度の行政組織にのっけてやろうじゃないかということもある。だから何がじゃましているかをまず出していくのが本筋だった。

古野 どうです。ここで一言ずつ感想なり、希望なりを……

中山 私はちょっと自慢してやろうと思って(笑)

私は総会シンポジウムの世話をしただけなんです、初めの予定のようにこれがきっかけで、後論議が展開されることが私の大きな希望だったのですがそれがうまく実現しそうだという気がするのです。私どもには組織、考える母体というものをもっていますからあと議論を展開することが出来ます。その意味であのようなものを取り上げて

“参考になった
総会シンポ「府県レベル……」”

埼玉県加須市役所保健婦

坂本 幸子さん



保健婦になり21年になります。学会には数回出席しましたが、今回はとくに母子保健のシンポジウムには期待しています。現状では市町村で母子保健の事業を行なうのは無理です。府県レベルからみた公衆衛生行政のシンポジウムは参考になりました。上の方は現場のことをよく知ってほしいと思います。大阪は2回目で天王寺駅の近くに宿をとりましたが静かでゆったりしていました。料理の味付も甘口ですがとてもおいしかったです。帰りは和歌山、白浜を回って帰る予定です。

“大阪の人の多いの圧倒された”

福岡県糸島保健所助産婦

石川 しのぶさん



福岡県は各保健所に助産婦を1名配置しているのですよ、私は職業から第7分科会の母子保健に興味を持っています。まず3才児健診のお話を聞きましたが、一せい健診がすんだ後でも7才までクリニックを保健所で実施するのはよいことですね。それと、精神衛生の面にも力を入れてやらなくてはと感じています。幼稚園へ行かない農家のこどもは知っていますが、人の前では発表することができないので。大阪の人は不親切だと車中で聞いていましたが、親切にさせていただいて喜んでいきます。大阪の人の多いのには圧倒されました。

もらったことは確かにありがたかった。平生考えると漠然としたものをその機会にある程度検討する母体の組織をつくるということです。

関 そうですね。それは全面的に僕は同意しますね。あなたの場合は提案し、かつ推進母体をおつくりになった。結果を発表するだけでなく、提案という機能は公衆衛生学会にあってもいいな、あまりそのへんが今までの学会は地道すぎた。

古野 今までの学会のあり方というのは自分のやったことをこうでありました、こういう実験をやったこんな結果がでましたというのが殆どでしょう。公衆衛生学会というのは、私はそういうものではなくて、いま関教授がいわれたように、問題投げかける、また、みんなで検討していくテーマを提起するというのがこの学会の特徴ではないかと思うのです。

古野 それからもう一つ、公衆衛生学会というのは非常に範囲が広い。またそれに関係する人たちも非常に複雑だ。医師あり獣医師あり薬剤師あり、保健婦あり看護婦ありその他技術者が大勢ありますね。これらのチームワークが公衆衛生なので、公衆衛生学会の特色もここにあるといえる。そういう方向に向いてきたことは私は非常に喜ばしいことだと思うのです。

中山 あの公衆衛生監視という分科会ができてインスペクターは非常に喜びましたね。

古野 いいはげみになりましたし、父のばしてやるべきだと思います。

関 ただあの場合、外国の例をみると必ずずドクターがはいりますな。

“大阪へは年2回くらい”

神奈川県

足柄上郡医師会長

清水 汪氏



私は永年足柄上郡の医師会長をやっていることで、こんど厚生大臣賞を受けたのですよ。私の開業している山北町は人口2万くらいの町で、15年くらい前から血圧の測定をはじめており公衆衛生は進んでおります。NHK から2回テレビで放送されたことがあります。現在、日大医学部同窓会副会長とか保健所運営協議会委員をしているので暇をみて学会へ出席しています。昨日は、名古屋で都市交通災害学会に出席していました。大阪へは年に2回くらいきています。みやげはいつもこんぶを買って帰ります。

中山 あまりインスペクターだけで編成しようとする意識がありすぎたかも知れませんね。

梶原 これは進歩の段階で自分ってものをはっきりさせようという時代なんだ。メディカルと、インスペクタークラス、ケースワーカーのクラスこれが各々自分をはっきりし、これが融和というところに行くべきだろうな。

古野 “進歩と調和に” 結びつきますね。(笑)
どうも有難うございました。

● 会場別 参加状況

本部で記録した各会場の実参加人員は3500人に達した。

		第1日		第2日		第3日	
		午前	午後	午前	午後	午前	午後
第1会場	住友生命ビル	250	—	200	210	270	—
第2々	大同ビル	80	—	300	—	300	—
第3々	関電ホール	150	150	150	100	150	—
第4々	阪大松下会館大講堂	1,200	1,300	400	1,300	150	700
第5々	阪大松下会館小講堂	160	—	160	160	100	—
第6々	日生中之島ビル大講堂	146	—	430	—	230	—
第7々	日生中之島ビル第1教室	65	180	180	—	50	—
第8々	日生中之島ビル第2教室	180	—	170	—	—	—
第9々	貿易センター	150	100	200	—	200	—

マンモス 学会 1年の歩み

39 9 19 梶原協会長、第21回日本公衆衛生 学会総会で次期学会開催を受諾

札幌市民会館

第21回日本公衆衛生学会総会は、9月18日から3日間、北海道大学構内で開催された。

その直前まで決定をみなかった次期学会開催地は、他に担当する県がないということから大阪に白羽の矢が立ち大阪はこれを受諾、梶原協会長は

9月19日、札幌市民会館で開催された総会においてバトンを引き継いだ。昭和32年、第12回学会を担当してから8年振りである。

39 10 2 第22回日本公衆衛生学会総会、企 画の基本態度を決める

阪大 米宮幸

大学と行政関係者をもって組織する大阪公衆衛生協会の理事、ならびに、専門部会長会を阪大米宮室において開催、組織の大綱、企画幹事、事業幹事の構成、事務局の位置、諸会議の開催会場、ならびに附帯行事の扱いなどの基本方針について協議した。

39 10 27 企画部の構成および方針を決める

府立公衆衛生研究所

企画幹事、準備組織、学会準備日程の概要、企画の方針、分科会、シンポジウム編成方針を決定ひき続いて11月9日、分科会の構成、分科会長ならびに、シンポジウム座長を決定した。

39 11 11 事業部の構成、および方針を決 める

府庁別館会議室

事業幹事、事業部準備組織、方針、総予算案の策定、ならびに今後の作業日程等について協議した。

39 12 19 企画幹事会、企画の概要を決める

厚生会館会議室

分科会、総会シンポジウムの構成ならびに、会場の候補地等について協議。日本公衆衛生雑誌に掲載する「学会案内予報——企画の概要」を決める。

39 12 25 会場候補地を実地踏査する

事業部実行委員

企画幹事会でとり上げられた会場候補地、阪大周辺の諸会場を実地踏査する。主会場となる阪大松下会館を中心として各会場の距離、徒歩の所要時間、会場要件等について調査、更に、学会開催期間中の会場借上について、可能なところは仮予約を行なった。

40 1 25 会場、予算案等を決める

府立公衆衛生研究所

候補会場踏査資料を中心として、位置、要件、

等について検討、この結果、会場は阪大医学部を中心とする6会場が適当であるとして借上事務手続きを進めることとする。

また、収支予算の細部についても協議、暫定資金については大阪公衆衛生協会より借入、分科会総会シンポジウム責任者に対し、準備金として、予算額の2分の1額を前渡することなどを決定。

40 2 23 公衆衛生大会を総会と併せ開催することを決定

府立公衆衛生研究所

さきに、2月17日、東京都内、日本公衆衛生協会において開催された中央幹事会の協議事項について安田府医務課長より報告、この内容を中心として学会総会の企画の細部について協議、総会と大会を同一会場で、同じ日に併せ開催すること、総会シンポジウムの演者等について決める。

40 3 31 演題募集

日本公衆衛生雑誌に、第22回日本公衆衛生学会総会案内、ならびに、演題募集を掲載する一方、各都道府県、指定都市衛生部局長あて応募について協力方文書をもって依頼する。

この後、さらに5月22日、応募促進について全国の大学衛生、公衆衛生学主任教授、都道府県、指定都市衛生部局長あて依頼する。

40 4 41 都道府県、指定都市に対して分担金を依頼

都道府県、指定都市の学会開催経費分担金については、さきに厚生省公衆衛生局金光保健所課長名をもって総額310万円の分担依頼（書簡）が発送されており、これに基づく請求時期、方法等について関係先へ照会。

40 6 16 応募演題609題を消化する各分科会の会場割当を行なう

府庁別館会議室

応募演題ついに609題に達する。提出された抄録を所属分科会毎に分類、配分し、分科会の規模ならびに演題数に応じ、会場、ならびに使用時間帯等の割当粗案を提示、これについては次回会議までに検討するよう依頼。

40 7 20 学会シンポジウム、分科会のスケジュールを決定

総会シンポジウム、分科会の会場割、時間帯について、最終調整を行ない、プログラムを決定する。各分科会共演題数が当初の予定よりはるかに多く、割当日程ならびに時間帯では倒底消化しきれないとして、これが延長を強く要望されたが、これを学会日程3日間の範囲内で延32か所の開催に圧縮し最終調整する。

40 8 20 学会総予算798万円確定

大阪府市町村会館

学会総予算798万円を決定、これに伴う収支予算書を作成、各都道府県、指定都市あて、請求する。

一方、公衆衛生大会、評議員会等関連事業担当要員確保、機材、資料の準備等、学会運営の細部について協議する。

40 9 20 学会運営組織の編成

大阪市北保健所

幹事、分科会長合同会議を開催、プログラム、（演題集）を中心に、運営組織の編成、ならびに学会運営に関する最終的な連絡調整をする。

この日、日本公衆衛生協会から周藤事務局長も出席。（演題集は9月15日全国の関係先へ送付した）

40 10 1～10 17

学会準備最終段階へ

“マンモス学会”の準備も最終段階へ……。事業部では、資料の収集、スライド、看板類、名札ブザー質問用紙その他学会運営に必要とする資材の確保に忙殺、この間、準備打合会を度々開催する。

40 10 18～19

器材資料の配分、設営、点検

阪大公衆衛生学教室に各会場、分科会、総会シンポジウム、個々に器材、消耗品を区分し各担当実行委員に配分、担当者は各自の会場において準備、点検、リハーサルなどを行なう。

一方、設営委託業者は看板類を搬入、午後10時までに概ね設営を完了。

学会を担当して ズバリ一言



第1分科会長
井田直美

衛生行政が独立して分科会をもったことは大阪が始めてで、それに責任と深い意義を感じた。心配した大会場は2日とも超満員で会員のこの分科会に対する関心の高いことを裏づけたと思える。それにしても衛生行政の討議は1回や2回で結論を得ることが困難だから、この分科会に関しては常設委員会が必要であろう。そこでまとめられた意見を学会へ報告するような学会運営を期待するのは私1人ではなかろう。



第2分科会長
八木明

大阪での学会はこの前もそうであったが例年のものと大分様子が異なっている。

奇をてらったわけではないが例によって例のごとくといった計画はしなかった。13の分科会、演題数600有余、これだけでもマンモス学会であった。しかし、準備期間中は楽しかった。ああでもない、こうでもない、ということが、何日も続いた。

学者、行政官、民間の人が1つになって頑張った。これは大阪の持ち味でもある。



第3分科会長
石田吉子

主題の選択、狙いの明確化について演者の依頼から効果的な展開へという過程は会の規模が大きくなるほど加速度的にむずかしくなっていくものであることを身をもって知った。

日常業務の体系づけと真剣な考察の積み重ねがあつた場に実力となって現われ、終わった瞬間いやというほどはねかえってくることも……

しかしそこで得た友情は、はねかえってきた力を用いて前進するのに大きい心の糧となった。



第4分科会長
猫西一也

“価値ある学会”だった。しかし、本当の評価は、この学会で明らかにされた諸問題を、どのような形で受止め、更に発展させるか、といった、われわれの姿勢や今後の歩み方にかかっていると思う。

1月26日。大阪で『京阪神三都市衛生監視員協議会』が組織され、食監、環監両職能団体が共同の場で、衛生監視制度を継続的に検討していくことになった。このような動きを、どのように受止めるのか、公衆衛生学会自身も、考えてほしい。



第5分科会長
朝倉新太郎

8年前大阪で開かれた学会で始めて「医療」は小委員会としてデビューした。分科会ではなかったので、いわば半人前だったのに、今回は晴れて分科会に仲間入りを許された。まだまだ未熟なものだが、そして、今後よそではどう扱われるかも分らないが今度大阪で学会が行なわれるときは、うんと大きく成長していることを信じている。



第6分科会長
堀内一弥

疫学、統計の分科会は演題を理論的なものにしほつたのに来会者が多くてイスが不足、討論も極めて活発で、近來にない盛会だったと自賛しております。要望講演として金光、浦田両先生に理論と実際の両面から概説していただいたのですが、いずれも示唆に富んだもので好評を博しました。理論疫学、統計の両自由集会はともに談論活発で大いに意気があがった次第です。



第7分科会長

丸 山 博

誕生から社会人になるまで一受胎から就職期一の保健活動に寄与している公衆衛生的、臨床医学的アプローチをつないで展望しようと、異なる行政分野の下にある両者をつなぐ具体的成果を求めたが、結果的にはその距離をちぢめるには行政的ワカがまだつよすぎて、この分科会の努力は成功しなかった。仲介役のむづかしさ。



第8B分科会長

藤 戸 貞 男

水にうつせば顔と顔が応じるという言葉のように、第22回日本公衆衛生学総会はその開催日の間全体の企画がセクト主義に陥らず、各々その特徴を生かしながらも立派にその姿が浮きぼりにされ、盛会裡に幕が閉じた。だがすべてに新しく装われたこの学会が……将来時と場所が変わっても引きつがれることが出来るであろうか。



第9分科会長

大 和 田 国 夫

分科会のテーマ自体が纏っていたので、演題は分類し易く、講演の効果が挙ったと考える。分科会シンポジウムも数回の打合せで演出効果もあったが、予算が少ないので、演者には迷惑をおかけした。準備その他は、優秀な幹事のお蔭で、分科会長としては非常に楽であって、いかなる場合も優秀な人材を得ることが必要であることを痛感した。



第10分科会長

東 田 敏 夫

日本公衆衛生学会は、毎年、開催当事者が変わるたびに、前年の業績や成果を御破算にして、『移り気』に、目先をかえた企画を追っている傾向があり、毎年、『堂々めぐり』している感なきにしもあらず。その意味では、40年の学会は、一步前

進を考えた意欲的なところがあったといつてよからう。しかし住民と直結するはずの『公衆衛生学』が、住民と遊離したまま、という点はのこされているし、各分科会の報告のなかには、先人の報告や研究を、はたして検討したか、より以上の発展めざしているか、うたがわしいものが少ない。



第11分科会長

久 保 正 徳

学会を担当したといつても、急に一身上の都合で一切は大阪市衛研の川北、井関両君を中心に国立衛験大阪支所および大阪府、市の関係の方々の非常な協力を得て、まずとどこおりなく行なえた。

この分科会は、多少“ままこ的”に扱われ、時間的にも会場割当にも非常に困った。それにも拘わらず演題も予想以上に多く、うれしい悲鳴をあげたが、発表時間の制約と会場が文字通り小講堂の手せまさのために、発表者の方々に非常な迷惑をかけたのは申し訳なかったと痛感している。



第12分科会長

渡 辺 弘

公衆衛生学会は大きすぎる。環境衛生分科会も大きすぎる。独自の性格と目的を明らかにして分化すべきである。便宜的なものであってはならない。過去未来へのつながりが集る人の心に通わねばならない。その上にこそ要望課題も生きてくるし、討論にもり上がりが出る。多くの人がすれ違った。足音を残して、どこかのターミナルのように……



総会シンポジウム(司会)

庄 司 光

「公衆衛生従事者の職能組織」のシンポジウムを担当して感じたことは、職能組織というのは、それぞれ家庭の事情があって、外からの批判を好まないものだということである。しかし、学会としては住民のための公衆衛生を発展させるためにやってゆかなければならないテーマである。勢い担当者は悪役をつとめることになる。

メッ センジャーボーイの弁

商売柄いささか大会ズレの傾向もあって、学会の裏方には自信もあったが、さすが全国規模のマンモス学会、関係機関の連絡調整もままならず、開催日がせまるにつれて次第に自信をそう失、もうどうにでもなれと精神錯乱のまま本番に突入。

おかげで今では、学会の請負業でもできる自信がついたが、もう二度と引受けたくないといった方が正直か。

裏 方 の 弁

目下ムード演出中

学会開催中私たちはよく走った。ときにはエレベーターを待ちきれずに4階までかけ上ることもあった。どの会場にも呼出用スライド係というのがあった。そこにはたえずコマネズミよろしくなかば腰をかがめるようにウロチョロする人間があった。タバコを一服ふかしながら、一体学会に呼出しは必須要件なのだろうかと問うてみた。ある人いわく“ウン、何ごともムードが大切だからナ”なるほど。

弁当屋張切るの巻

第1日目の弁当は午後1時ごろになった。各会場からヤイノ、ヤイノとさいそくされたが、水戸軒の車がエンコ。第2日目は約20個の不足で本部

関係は午後4時の昼食。第3日目でやっ和时间も数もマアマアとなる。弁当を配給するのも、9会場、担当者350人のマンモス学会となるとむつかしいもの。何せ食いものの恨みは恐いからね。次の学会にはこの経験を生かしてうまい弁当を手早く配給したいと張切っているんだが……。

変化自在、融通無限

学会、総会のメイン会場の運営、朝からは大世帯の分科会、昼からは総会シンポジウムと連日相手変われど主変らず、いろいろ変った注文の続出に困ったあげく、どんと腰をおちつけ舞台裏の詰所に大書して曰く、「変化自在、融通無限」それにしても、あれだけは多くの人達の集まる会場の運営には、かなりの弾力的運営を心掛けないと到底無理であることを痛感した次第。

それにしても、一致協力、舞台裏で奮闘いただいた皆さんに心からお礼をのべたい。

寄付集めにもコツ

私は職掌柄行事のある毎によく寄付集めをやらされる。この実績のためか今学会でも渉外担当を命ぜられ各商社を廻る羽目になった。

寄付集めは簡単なようでなかなかむつかしく、これにもやはり「コツ」がある。これを会得しないと十分な成果は挙げ得ない。私も数年の経験を経てわかりかけてきた。この「コツ」を一口に言えば寄付をお願いするのに妙な話であるが「欲しがらない」ということだと思う。

モグラ居士の管見記

“終良ければすべて良し”の格言通りの本学会。北海道から引継ぎしたとき、“果たしてスムーズに運営できるだろうか?”という不安感が、いつしか日を追うにつれ、何となく自信ムードにかわっていったこの1年だった。“行政と大学、関係機関の協調”という大阪方式の基盤があったとはいえ、学会運営にあたった人々の陰ながらの努力、熱意の結集、これこそ本学会の原動力だったという感がひとしお強い。

第22回 日本公衆衛生学会総会の概要

1. 学会長・副会長

学会長	大阪公衆衛生協会長 大阪大学名誉教授	梶原 三 郎
副会長	大阪府立公衆衛生研究所長	古 野 秀 雄
〃	大阪府衛生部長	安 田 一 男
〃	大阪市衛生局長	岩 前 五 六

2. 学会総会事務局

大阪市東区大手前之町 大阪府衛生部衛生総務課内

3. 分科会及び分科会長

- 第1分科会 衛生行政 井田 直美(大阪府池田保健所長)
- 第2分科会 地区公衆衛生 活動—その理論と技術
八木 明(大阪府衛生部参事兼医務課長)
- 第3分科会 公衆衛生看護
石田 吉子(大阪市衛生局保健婦係長)
- 第4分科会 公衆衛生監視
猪西 一也(大阪市西成保健所衛生課長)
- 第5分科会 医 療 朝倉新太郎(大阪大学助教授)
- 第6分科会 衛生統計・疫学
堀内 一弥(大阪市立大学教授)
- 第7分科会 母子・学校保健 丸山 博(大阪大学助教授)
- 第8分科会 感染症の原因追求と対策
(A) 細菌およびウイルス性疾患(細菌性食中毒を含む)
國田 信治(大阪府立公衛研・公衆衛生部長)

(B) 医動物(衛生動物・寄生虫)

藤戸 貞男(大阪府衛生部環境衛生課主幹)

第9分科会 成人病と老人の衛生

大和田国夫(大阪市立大学教授)

第10分科会 結 核 東田 敏夫(関西医科大学教授)

第11分科会 栄養、食品衛生、薬事衛生

久保 正徳(武庫川女子大学教授)

第12分科会 環境衛生

渡辺 弘(大阪市衛生研究所環境医学課長)

第13分科会 精神衛生

金子 仁郎(大阪大学教授)

4. 期 日

昭和40年10月20日(水)・21日(木)・22日(金)

5. 総 会

10月20日(水) 13.30~14.00 阪大松下会館大講堂

6. 関連行事日程

(1) 全国公衆衛生大会

10月20日(水) 14.00~15.00 阪大松下会館大講堂

(2) 全国保健所長会

10月18日19日(午前のみ) 日本生命(本社)ホール

(3) 地方衛生研究所全国協議会

10月19日(火)10.00~16.00 大阪府立公衆衛生研究所
講堂

(4) 衛生学公衆衛生学教育協議会

10月19日(火) 15.00~20.00 藤沢薬品ホール

第22回 日本公衆衛生学会総会および分科会日程一覽表

日 時	会 場	10月20日(水)		10月21日(木)		10月22日(金)	
		午前の部 (9.00~13.00)	午後の部 (14.00~17.00)	午前の部 (9.00~13.00)	午後の部 (14.00~17.00)	午前の部 (9.00~13.00)	午後の部 (14.00~17.00)
第22回 日本公衆衛生学会総会および分科会日程一覽表	第一会場 住友生命	第9分科会 一般口演		第9分科会 一般口演	第9分科会 一般口演	第13分科会 一般口演 シンポジウム (11.00~13.00)	
	第二会場 大同生命	第5分科会 シンポジウム (9.00~11.00) 一般口演		第10分科会 一般口演 壁発表		第10分科会 一般口演 シンポジウム (10.40~13.00)	
	第三会場 関電ホール	第12分科会 シンポジウム (9.00~12.00)	第12分科会 一般口演 (15.00~17.00)	第12分科会 一般口演	第12分科会 一般口演	第12分科会 一般口演 壁発表	
	第四会場 太講堂	第3分科会 一般口演 シンポジウム (10.40~13.00)	総 会 (13.30~14.00) 公衆衛生大会 (14.00~15.00) 総会シンポジウム (I) (15.00~17.30)	第4分科会 一般口演 シンポジウム (9.50~13.00)	総会シンポジウム (II)	第9分科会 シンポジウム (10.00~12.30)	総会シンポジウム (III)
	第五会場 小講堂	第11分科会 一般口演 特別講演 (11.50~12.50)		第11分科会 一般口演	第11分科会 一般口演	第4分科会 一般口演	
	第六会場 大講堂	第1分科会 一般口演 シンポジウム (10.00~12.30)		第1分科会 一般口演 シンポジウム (10.00~12.30)		第2分科会 一般口演 シンポジウム (10.30~13.00)	
	第七会場 第1教室	第8分科会(B) シンポジウム (9.00~10.30) 一般口演	第6分科会 要望課題講演 (15.00~17.00)	第2分科会 一般口演		第6分科会 壁発表	
	第八会場 第2教室	第7分科会 一般口演		第7分科会 一般口演			
	第九会場 貿易センター	第8分科会(A) 一般口演	第8分科会(A) 一般口演 (15.00~17.00)	第8分科会(A) 一般口演		第8分科会(A) 一般口演	

総会シンポジウム

I. 府県レベルからみた公衆衛生行政 (15.00～17.30)

司	会	古	野	秀	雄	(大阪府公衆衛生研究所長)
演	者	福	田	千	代	太 (長崎県衛生部長)
		須	川		豊	(兵庫県衛生部長)
		幸	康		一	(長野県衛生部長)
		田	波	幸	男	(日本公衆衛生協会理事)
		斯	波	八	郎	(山形県寒河江保健所長)
		田	中	正	四	(広島大学教授)

前 川 藤 造 (熊本県衛生部長)

II. 総合保健活動の成立の条件 (14.00～17.00)

司	会	西	尾	雅	七	(京都大学教授)
演	者	小	倉	襄	二	(同志社大学教授)
		朝	倉	新	太	郎 (大阪大学助教授)
		石	垣	純	二	(医学評論家)
		若	月	俊	一	(佐久総合病院長)
討	論	橋	本	正	己	(公衆衛生院部長)
		小	川	喜	一	(大阪市立大学教授)
		本	田	良	寛	(済生会今宮診療所長)

III. 公衆衛生従事者の職能組織 (14.00～17.30)

司	会	庄	司	光	(京都大学教授)
---	---	---	---	---	----------

＜第1部＞ 職能代表による討議

演	者	高	木	剛	一	(全国保健所長会長・東京都中央保健所長)
		崎	川	サ	子	(日本看護協会保健婦会会長・農林省入殖営農課技官)
		土	井	敏	男	(全国食品衛生監視員協議会理事・厚生省食品衛生課技官)
		藤	戸	貞	男	(全国環境衛生職員団体協議会幹事・大阪府衛生部環境衛生課主幹)
		原	島		進	(日本公衆衛生協会理事・慶応大学教授)

＜第2部＞ 自由な立場からの討議

演	者	中	山	信	正	(大阪市衛生研究所長)
		小	林	治	一	郎 (神戸市長田保健所長)
		仙	賀	ま	す	み (兵庫県立厚生専門学院次長)
		太	田	満	男	(名古屋市長公衆衛生課)
		加	藤	幹	夫	(川崎市衛生課)
		青	木	吉	蔵	(自治研・横浜市西保健所)

分科会

分科会名	一般口演数	分科会シンポジウムならびに特別講演
第1分科会	8	都市衛生行政の強化をめぐる 保健衛生行政制度のあり方 ——母子保健法をめぐる——
第2分科会	33	地区組織活動の特性と行政の接点について
第3分科会	12	わが国公衆衛生看護活動の史的考察
第4分科会	34	衛生監視制度はいかにあるべきか
第5分科会	20	救急医療の諸問題
第6分科会	25	要望課題講演 {疫学の方法論について {地方衛生統計の意義
第7分科会	59	
第8(A)分科会	94	
第8(B)分科会	15	衛生動物駆除の効果判定の標準化
第9分科会	68	わが国における循環器疾患の特異像
第10分科会	53	結核患者の社会復帰をめぐる問題
第11分科会	64	特別講演 食品添加物の問題点と規格
第12分科会	111	環境基準を中心としてみた環境衛生の動向
第13分科会	13	保健所における精神衛生活動のあり方

大 阪 公 衆 衛 生 NO. 17

発 行 : 昭 和 41 年 4 月 1 日
編集責任者 : 関 梯 四 郎

発 行 者 : 梶 原 三 郎
発 行 所 : 大阪市東区大手前之町
(大阪府庁内)

編集担当者 : 岸 田 勲 (府衛生総務課)
尾 北 助 (府衛生総務課)
近 藤 喜 男 (府枚方保健所)
足 羽 治 (府茨木保健所)
鎌 田 平 (市・東保健所)
小 西 金 二 (市・西保健所)

大 阪 公 衆 衛 生 協 会

印刷 : 日本写真印刷株式会社

OSAKA PUBLIC HEALTH REPORTS

